

## 高原 光<sup>1</sup>・西田治文<sup>2</sup>:第13回国際花粉学会議 (IPC-XIII) および第9回国際古植物学会議 (IOPC-IX) の2012年日本への招致について

Hikaru Takahara<sup>1</sup> and Harufumi Nishida<sup>2</sup>: Invitation of 13<sup>th</sup> International Palynological Congress (IPC-XIII) and 9<sup>th</sup> International Organization of Palaeobotany Conference (IOPC-IX) to Japan in 2012

国際花粉学会 (IFPS) と国際古植物学会 (IOP) は、従来4年ごとの大会を同一国内において会期を近づけて開催することを慣例としていたが、2004年だけは、スペインとアルゼンチンに分かれて開催した。しかし、研究対象と手法にかなりの重複がある両学会にとって、分離開催はメリットが少ないという意見が大勢となり、2008年度のボン大会は、会期も連続した合同大会となる。このような合同開催は、双方の分野に関係する参加者にとって学問的にも経済的にも大きなメリットとなるので、今後同様の開催形式をとることが、両学会において確認されている。

ボン大会後の次期開催地候補について、IFPSとIOPは、2006年から非公式に選定を始め、最有力候補として日本開催の可能性を、日本花粉学会の高原光会長及び、IOPの地域代表である西田治文が打診された。IFPSにはアルゼンチンからの招致呼びかけもあったようであるが、前回のIOPC (国際古植物学会議) が同国であったため、採択される可能性はないとのことであった。

両学会の意向をうけ、日本国内では、花粉学会を中心とした招致検討委員会が設置され、2007年には具体的な諸条件の検討に入った。日本には、古植物学のみを基幹学会が無い場合、招致をするとすれば、日本花粉学会が主たる招致機関となる。IPCとIOPC (国際花粉学会議) の合同開催が基本方針となったこともあって、IOP関連の作業主体は日本の地域メンバーが中心となって行わざるを得ない。

日本花粉学会の招致検討委員会には、IOPメンバーとして植村和彦氏 (国立科学博物館) と西田が加わり、数回の議論を重ねた末、招致可能と判断して2007年9月21日の日本花粉学会評議員会に招致可能との答申を行った。花粉学会評議員会は、同日招致を決定し、翌22日の総会において、招致議案が承認された。今後、あらたに日本花粉学会会員とIOPの国内メンバーと合同の招致委員会を構成し、具体的な作業に入ることが確認された。また、来年のボン大会のIPCとIOPCにおいて、招致表明を行うこととなる。

花粉学及び古植物学は、日本植生史学会にも深く関連する領域であり、会員にも双方の関係者が多数いる。2012年の招致については、日本花粉学会が主催学会となるが、実働人員の確保と、なによりも開催資金の集積が最重要課題であり、ひとり日本花粉学会のみでは十分な準備と開催業務の完遂は不可能である。関連する他学会にも共催や協力をお願いしなければならない。日本植生史学会の会員諸氏におかれても、是非前向きなご援助をいただければ幸いである。

<sup>1</sup> 〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 京都府立大学農学部附属演習林

<sup>2</sup> 〒112-8551 文京区春日1-13-27 中央大学理工学部地学・生物学教室